南ぬ風

ふぇーぬかじ

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

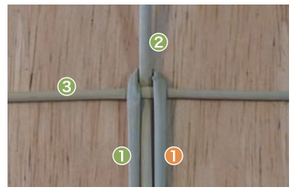
Vol.30
2014.1~3
冬号

美ら島 ワクワク工作室

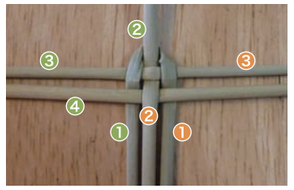
身近な素材を使ったクラフトや工作、昔ながらの手作りおもちゃなどを紹介します。

作り方

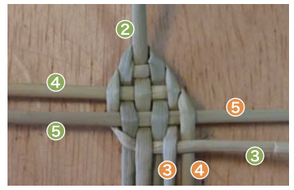
(1)横のイグサ❶の上に、縦のイグサ❷を置いて十字にする。



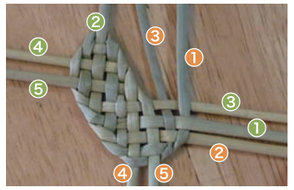
(2)❷の上に横向きに❸を置き、❶❶の両方を下に折って❸に重ねる。



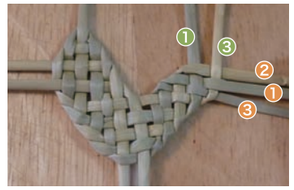
(3)❷の下をくぐらせて❶❶の上に❹を横向きに置く。



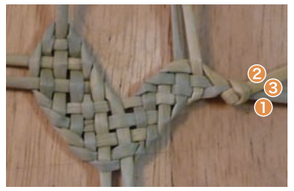
(4)この作業を繰り返して、馬の胴体部分を作っていく。



(5)❷の尾の部分と❹❺❹❺の脚を残し❶を上に曲げて❷❶❸と編み首の部分を作る。



(6)❸❶❷を右に曲げて❶❸に折り込む。❶❸は耳に❷❶❸の3本で顔を編む。



(7)❷で❶❸をしっかり縛って、口を止める。

(8)尾、前後の脚、耳、口の余分な部分を切ってでき上がり。

イグサで馬グワー

材料

イグサ／長さ30センチのものを5本

※地域によって、麦藁・稲藁・アダンなどいろいろな身近な植物で作られる。

イグサってどんな植物？

写真：イグサの仲間

イグサは単子葉植物イグサ科の植物です。沖縄では方言で「ビーグ」と言われています。沖縄を含めた日本では昔から畳やゴザなどの材料としても利用され親しまれています。

見本制作者：西平守孝

沖縄美ら島財団の工作教室に参加してみませんか？

当財団では主にお子様を対象として「美ら海・美ら島工作室」や「クラフト作り」等を開催しています。
参加ご希望の方は下記ホームページでイベント情報をチェックしてみてください。

美ら島研究センター
http://okichura.jp/ocrc/event/kousakushitu/

沖縄県立 名護青少年の家
http://www.opnyc.jp/

海洋博公園
http://oki-park.jp/index2.html

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌
季刊誌 南ぬ風 冬号 vol.30 2014. 1～3

編集・発行／ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 Okinawa Churashima Foundation

2014年1月発行

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888 TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

巻頭インタビュー

美ら島をつなぐ人 Vol.4

ウミガメ保護活動家

嘉陽宗幸

KAYOU MUNEYUKI

日本ウミガメ協議会会員。1953（昭和28）年、国頭村桃原生まれ。日々の調査結果は、毎年11月の日本ウミガメ会議で報告。調査を始めた頃は「何してる人？」と怪しまれることもあったが、今は国頭村で知らない人はいないほど。「人間の孫は5人だけど、孫ガメは何千匹もいますよ」と笑う。

人の手が入っていない天然のビーチで、ウミガメの産卵を見守って12年目。

毎年4月から9月にかけて、沖縄へと産卵にやって来るのは、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種類。「護岸工事の施された場所や人工ビーチより、天然の浜をめざして上陸してくるウミガメが多いんですが、生態はよくわかっていないんですよ」と語るのは日本ウミガメ協議会会員の嘉陽さん。産卵シーズンには毎日国頭村の各ビーチを観察している嘉陽さんに、ウミガメの調査・保護活動について話を聞いた。

contents

作品タイトル「タンカンに手を伸ばす子供を眺めるウグイス。」
木にとまったウグイスたちが、上に向かって手を伸ばし、タンカンを摘む子どもを楽しげに木から見ている様子を表現しています。

表紙イラストについて
与儀 勝之 Masayuki Yogi
琉球イラストレーション作家　那覇市生まれ。

誌名「南ぬ風（ふぇーぬかじ）」とは…
南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思います。

美ら島をつなぐ人 …… 02
沖縄のこころ …… 04
美ら島生き物日記 …… 05
調査研究 …… 06
水族館で出会える生き物 …… 07
普及啓発 …… 08
御城物語 …… 09
運営管理 …… 10
スポットライトの向こう側 …… 12
沖縄の大木 …… 13
財団いんふぉ …… 14
美ら島ワクワク工作室 …… 裏表紙

2012年10月1日、財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団は『一般財団法人 沖縄美ら島財団』となりました。

自然が残る浜ほど、産んだ卵をアカマタ（ヘビ）に狙われることも。人間が捨てたゴミに遮られて、せっかく孵化しても海にたどり着けない仔ガメも少なくない。本来は夜中に産卵するウミガメだが、適した場所が見つからずに産卵場所を探しているうちに夜が明けてしまうこともあるとか。

ウミガメが安心して産卵できる環境を守りたい。

—ウミガメの調査を始めたキッカケを教えてください。

たまたま11年前に、大宜味村で調査をされている米須邦雄さんに「国頭村で調査する人はいないかな」と言われたのがキッカケで。僕の地元でも食糧難だった時代はカメの卵を食べていたんですが、その後もずっと産卵が続いていたとは米須さんに聞くまで知らなかったんです。じゃあ僕がやります、と。

—それにしても気軽にやりますと言える内容ではないような…。

技術は米須さんに教えてもらって、飲み込みは早かったかな（笑）。今年の4月に早期退職をするまで11年間は、毎朝5時頃家を出て、桃原から沖縄本島最北端の辺戸岬まで、砂浜に残るウミガメの足跡をチェックしてから出勤していました。辺戸岬から東海岸側は双眼鏡で毎朝確認をして、産卵があったら、週末の引き潮の時間帯に海側の岩場を2キロほど歩いて現場の砂浜へ行きます。調査をして、種を特定してマーキングをするんです。

—マーキングと言いますと？

ウミガメは穴を掘って産卵したら、砂をかけて圧をかけて卵を隠します。砂浜に残ったキャタピラ状の足跡を見れば、だいたいこの辺りという場所がわかるので、そこに調査用の杭を差し込んで、産卵しているかどうかを確認するんです。産卵していれば、周囲の四隅にペンキを塗った石を置き、札をつけた園芸用の支柱を立てておきます。札には、その浜での一連番号と、アカかアオかの種類、日付を記入して、「ウミガメの調査中」と書きます。ここでウミガメが産卵しましたよと宣伝すると、人間への啓蒙にもなる。

—種類の識別方法は？

足跡でわかります。沖縄本島ではアカウミガメが約9割、宮古・八重山ではアオが多いようですね。2年前には沖縄本島では珍しいタイマイの産卵を発見しました。ちょっと変わった足跡の時は沖縄美ら島財団にすぐ連絡して、卵などの詳しい調査をしてもらいます。4～5年前にはアカとアオのハーフがいましたねぇ。

—ウミガメの産卵というと、観光客の関心も高いでしょう。

産卵や孵化を見たいという人はたくさんいます。調査中も「いつ産みますか」「いつ孵化しますか」とよく聞かれるけど、それは僕らにもわかりません（笑）。上陸しても、産まずに海へ帰るのもいる。国頭村では、最近産卵が増加傾向です。専門家もよくわからないとのことなので、理由はカメに聞いてみないと（笑）。日本で生まれたアカウミガメがアメリカ西海岸から産卵のために再び日本に戻るまで30年ほどかかると言われますから、もっと長い目で個体数が増えているのか、一個体あたりの産卵回数が増えているのかなど、調査をしないと詳細はわかりません。

—日本ウミガメ協議会ではウミガメの個体調査もしていますね？

僕も浜でウミガメに出会ったらいつでも個体識別タグをつけられるように道具を持ち歩いています。個体識別タグを装着したウミガメの情報は日本ウミガメ協議会へ報告しています。

また、沖縄科学技術大学院大学や沖縄美ら島財団などへの調査協力も行っています。

—嘉陽さんのように地道な調査をしてくれる方がいてこそ、わかることもありますね。

誰に命令されたわけでもないのに、すっかりハマって抜けられない。日課のようなもので、まぁ健康にもいいでしょう（笑）。毎日見ていると、自然の砂浜は生きていることを実感します。冬場はジャリが多いけど、夏は砂が増えるとか、自然の海岸は毎日更新を繰り返している。美しく見えても動かないのは人工ビーチです。僕は自然のこと、ウミガメのことを、地元の子どもたちにもっと知ってほしいですねぇ」

上：辺戸岬から双眼鏡で砂浜に残るカメの足跡をチェックする嘉陽さん。　下：ウミガメ調査の七つ道具。杖のような調査用の杭はお手製。砂浜に何度も差し込むうちに短くなる。調査用の手帳には日々の調査結果がビッシリ！ペンチ状の道具（プライヤー）はピアスのように金属製のタグをカメにつける為に使用。L字型のスケール（ノギス）はカメの甲長を計測する。

沖縄のこころ Vol.4

地域の伝統・文化を支える人たち

ウシブラやドラなど独特の楽器を使用する路次楽隊

首里王府の路次楽（るじがく）

路次楽とは御座楽（うざがく）と並ぶ宮廷音楽で、1522年に慶賀使（けいがし）として明（みん）へ渡った沢岻盛里（たくしせいり）が琉球へ持ち帰ったと伝わる。御座楽が座って奏でるアンサンブルなら、路次楽はマーチング曲だ。国王が外出する際と、王府が江戸幕府に送った琉球使節が本土の都市部でパレードをする際に演奏された。

首里では楽器の多くが戦火で失われたが、1977（昭和52）年に首里王府路次楽保存会が結成され、資料を元に路次楽の楽器や演奏を復元。翌年以降、11月3日開催の琉球王朝祭り首里（旧首里文化祭）の古式行列では、同保存会による路次楽が演奏される。

「過去の実績としては、NHKの大河ドラマ『琉球の風』や、九州沖縄サミット各国首脳夕食会などがあります」

と言うのは同保存会の阿波連本勇（あはれんほんゆう）会長。ご自身の路次楽歴は、1963（昭和38）年から数えて50年。王府最後の路次楽奏者・知念三郎氏を父に持つ知念賢松（けんしょう）氏に師事したため、王府の流れをくむ路次楽の継承者だと言える。同保存会では、普段は週に一度御座楽の稽古を行い、例年8月頃から古式行列に向けて路次楽の稽古を始める。

「現在、※ガクブラ奏者が私一人なので、後継者を養成しなくてはなりません。実は路次楽については、まだまだ研究し足りないところがある。例えば、江戸上り行列の演奏は楽譜通りだったのかどうか。奏者としては、より賑やかに演奏して、琉球の存在をアピールしたのではないかと思うんですよ。将来の研究成果に期待したいですね」

左：首里王府路次楽保存会会長の阿波連本勇さん　右：御座楽をけいこ中の首里王府路次楽保存会
※ガクブラとは中国から伝わった管楽器。ビーラルラーという別名が示す通り、チャルメラに似た音色。

美ら島 生き物日記 Vol.4

やんばるの渓流に生きる植物たち

写真・文
白鳥岳朋（しらとりたけとも）
東京生まれ、沖縄在住の水中＆陸上　全天候型カメラマン。
1988年から水中撮影を開始。
主な著書・写真集に『おさかな接近術』（阪急コミュニケーションズ）、『水中を撮る！』（雷鳥社）など。

どこにでも生えているツワブキも、渓流帯では姿を渓流バージョンに変え「リュウキュウツワブキ」と呼ばれる。普通は丸っこいハート型の葉が、渓流帯では狭く、葉のつけ根の角度も鋭角になり、どことなくシャープな印象。

やんばるをドライブすれば、誰もが緑の豊かさを感じるだろう。森の中へと入っていくと、その深さを実感する。

「やんばるの渓流は川幅が狭く、ちょっと大雨が続くとすぐに水位が上がります。普段は水面より上にあっても大雨が降ると水没する場所を渓流帯、そこに生息する植物を渓流植物と言うんですよ」

沖縄美ら島財団の阿部篤志研究第二係長によると、渓流植物は特殊な進化をしているのだとか。

「植物にとって、渓流帯はリスクのある場所であると同時に、他の植物つまりライバルがいない場所でもある。水没してもいいように、渓流植物は自らの形状を変え、固有種にまで進化してしまう場合もあるんです」

水の抵抗を少なくするために葉は小さく、細く。時には切り込みが入ることもある。根は岩場にへばりつくように張る。さらには泥などが付着しないように毛（毛状突起）が薄い・無いといった具合に、独自に変化した渓流植物。いのち豊かな水辺の風景に、彼らは欠かせない。涙ぐましい努力を知るほどに愛おしくなってくる。

「ザトウクジラ調査」～ホエールウォッチング事業者との連携～

ザトウクジラは、全長12～14mの大型鯨類で、夏には摂餌のためロシアやアラスカなどへ、冬には繁殖や育児のため沖縄やハワイなどへ大規模な季節回遊を行うことが知られています。1月から4月にかけて南西諸島（奄美群島、沖縄・宮古・八重山諸島）全域の様々な場所でみられ、なかでも、慶良間諸島、本部半島周辺、那覇市周辺、沖永良部島、奄美大島の周辺では本種を対象としたホエールウォッチングツアーが盛んに行われています。

ザトウクジラは、1960年代初頭まで、沖縄を含む世界中で捕鯨の対象とされており、生息数が激減しました。しかし、1966年、国際捕鯨委員会により捕鯨が禁止されて以降、生息数は徐々に回復しつつあります。そこで、沖縄周辺にどれくらいのザトウクジラが来遊しているのかを知るため、当財団では1990年に調査を開始しました。

本種は、尾びれの腹側の色彩や後縁の形状が個体ごとに異なるため、撮影した尾びれの写真を比較することで個体を識別することができます。現在、尾びれ写真による個体識別はアメリカ、メキシコ、日本など世界各地で行われています。

当財団のザトウクジラ調査では、識別した個体ごとに番号をつけ、それぞれの発見時期や発見場所の情報をまとめることで、来遊履歴を作成しています。この来遊履歴の情報をもとに、同じ個体の発見場所を経時的に追うことで、どこを通り移動しているのかを知ることができます。また、統計学的な推定式を用いて何頭ほどが来遊しているのかを算出することもできます。尾びれ写真はザトウクジラを調査するにあたり重要な情報となっているのです。

そこで、できる限り多くの写真を収集するため、各地のホエールウォッチング事業者からもツアー中に撮影した写真を提供頂けるよう呼びかけています。写真は沖縄周辺だけでなく、沖永良部島、奄美大島、北海道などからも提供頂いています。

これまでの調査により、沖縄に来遊した個体が北海道や奄美大島周辺、沖永良部島でも確認されていたことがわかりました。また、2010年までに識別された1026頭分の個体情報をもとに来遊数を推定した結果、現在、年間約1000頭が沖縄周辺に来遊していると算出されました。この数は年々増加傾向にあることから、さらに今後も増えることが予想されます。

これからも地域の方々の協力を得ながら調査を継続するとともに、講演会などを実施し調査成果を発信していきたいと考えています。

（岡部 晴菜）

ザトウクジラのジャンプ

調査の様子（本部半島沖）

ホエールウォッチングの様子（本部半島沖）

ザトウクジラの尾びれ

沖縄 美ら海水族館で出会える生き物 Vol.2

種苗生産されたヒメシャコガイ

和　名：ヒメシャコガイ
科　名：シャコガイ科
学　名：*Tridacna crocea*
沖縄名：アジケー

ヒメシャコガイはシャコガイ類の仲間で、日本では琉球列島のサンゴ礁域に生息する殻長約10cmの小型の二枚貝です。沖縄には、6種類のシャコガイ類（ヒメシャコガイ、ヒレシャコガイ、シラナミガイ、トガリシラナミガイ、ヒレナシシャコガイ、シャゴウガイ）が生息しています。

シャコガイ類は体内に単細胞藻類を共生させ、その光合成でできた栄養分を利用します。そのため太陽の光を通す澄んだ海水が必要です。また、シャコガイ類は雄性先熟で幼貝のころはすべてオスの性質を持ち、大きくなると両性（雌雄同体）になり放卵放精して子孫を増やします。食用になることから乱獲などで個体数が減少しているため、近年では種苗生産が行われています。

（伊藝　元）

海洋博公園海洋文化館ガイドツアー

ガイドツアーの様子

リエンポロワット号

ガイドツアーの様子

海洋文化館は、「海―その望ましい未来」をテーマに世界初の特別博覧会として1975年から翌1976年に開催された「沖縄国際海洋博覧会」の中で「黒潮に生きる」をテーマに600点余りの展示品とプラネタリウムを使った映像ホールにより日本を含む太平洋地域の「海」にかかる文化と歴史を紹介した施設です。また、国営沖縄記念公園海洋博覧会地区としてたくさんのみなさんにご利用いただいている現在も「沖縄国際海洋博覧会」当時から公開を続ける唯一の施設となっています。

沖縄国際海洋博覧会から40年近く経過し、これまでも大型の補修工事や展示ホール改修工事などが行われてきましたが、この度、3年余りの工期をかけ、プラネタリウムホールと展示ホールの本格的な改修を行いました。2011年6月、座席数189席、最新の「ケイロン・ハイブリッド」プラネタリウムの設置に加え、沖縄の星にまつわる民話を題材にした「沖縄の美ら星」というオリジナルコンテンツの投映等によるリニューアルオープンしたプラネタリウムホールに続き、このほど展示ホールのリニューアルが完了し、2013年10月11日、海洋文化館はグランドオープンしました。

今回のリニューアルにより海洋文化館は、ダブルカヌー（タヒチ）、リエンポロワット号（ミクロネシア）、クラカヌー、ラカトイ（パプアニューギニア）などの太平洋地域・マチキフニ、本ハギ、南洋ハギのサバニなどの沖縄地域の大小様々なカヌーを展示する、カヌー類の展示施設としては世界最大規模の施設となりました。

また、これらカヌー類の展示に加え、太平洋地域の「住」、「食」、「装い」等に関する展示品や映像資料、床面と壁面を利用した大型スクリーンによる複合演出映像等、沖縄を含めた太平洋地域における海洋民族の歴史や文化を楽しみながら学べる充実した施設となっています。

その海洋文化館の持つ魅力を最大限に発揮するため、解説員によるガイドツアーも、増員を行うとともに、専門家のアドバイスや詳細なマニュアルの設定、それに基づくガイドツアーの訓練を重ねました。実施回数もリニューアル前の1日2回から、1日6回へと大幅に増やし、海洋文化館の利用促進と入館者の満足度向上に努めております。また、日々のお客様からのご意見・感想などもきめ細かく収集し、必要に応じ、ガイドマニュアルの追加や案内解説の表現の修正、補助的な案内板の追加設置、館内における案内放送時間の変更など施設運営に反映させております。

今後も施設の利用形態に併せた対応方法の実施と必要に応じた修正、ガイドツアーの内容の充実を図り、海洋文化館の利用促進とお客様の満足度向上に努めていきたいと思います。

（宮里　正）

～ ガイドツアー ～

回　数：1日6回
料　金：無料（別途入館料要）
※海洋文化館入館料は、
大人（高校生以上）：170円
小人（小・中学生）：50円
人　数：20名／回

お問合せ先
海洋博公園管理センター　Tel：0980-48-2741

御城物語（うぐしくものがたり）Vol.3

かつて、首里の人々が「御城（うぐしく）」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。
首里城とその周辺に関係するトリビアを語る歴史エッセイ。

首里城正殿　唐破豊（からはふう）の秘密

首里城の「顔」ともいうべき、中央部分のことを唐破豊（からはふう）と言います。屋根や壁に龍がいっぱい描かれていて、日本のお城とはちょっと違った雰囲気を醸し出していると思います。

この唐破豊、「唐」とついているので、中国建築の影響があるのかと思いきや、実は日本の神社や、お寺などによくみられる和風建築なのです。

ちなみに、首里城では唐破豊と言いますが、本来の建築用語では「唐破風」と言うようです。琉球では、唐破風の「破れる」という字が縁起が悪いので、縁起のいい「玻」という字を当て字として使い、唐玻豊としたことが、琉球王国の正史の一つである『球陽』に記録されています。

また、この唐玻豊、屋根が美しい弓なりのカーブの曲線を描いていますが、日本の唐破風は正面が弓なりだと、屋根の後ろまでずっと同じ弓なりのカーブの屋根を作るのが普通です。しかし、首里城は、後ろの見えない部分は、普通の三角屋根となっています。

弓なりの難しいカーブの曲線を屋根につけるのが大変なので、見えないところは簡単な三角屋根にしたのでしょうか。とても合理的に作られているのです。この首里城だけにしかない昔の人の合理的な屋根の作りは残念ながら正面からは見えませんが、見学ルートで一箇所だけ、見えるところがあります。そこは、見学ルートの右側、赤く塗られていない南殿二階の廊下です。ここからは、唐玻豊の正面のカーブの曲線と後ろの三角屋根の両方を見ることができます。

鮮やかな赤い彩色や、龍がたくさん描かれている独特のデザインに圧倒されてしまいがちですが、正殿の魅力は、こんな細かなところにも、驚きの発見があるのです。正殿だけの建築の魅力、ぜひあなたもチェックしてみてはいかがでしょうか。

（上江洲安亨）

南殿二階から見た首里城正殿の唐玻豊
唐玻豊の全面は美しい弓なりのカーブを描いていますが、
後部はシンプルな三角屋根になっています。

首里城正殿の唐玻豊
首里城正殿の中央の顔とも言うべき
重要な部分です。

熱帯ドリームセンター

植物の展示を通して、熱帯・亜熱帯植物の魅力を伝えたい。

ランの温室は、コチョウランの仲間を集めたファレノプシス温室、ヒスイランの仲間を集めたバンダ温室、カトレアの仲間を集めたカトレア温室の３棟がある。

さまざまな取り組みで、より多くの人に癒しの空間を。

さまざまな種類のラン、熱帯の珍しい果樹、淡水魚が泳ぐ水辺。大勢の観光客で賑わう沖縄美ら海水族館やオキちゃん劇場がアクティブな動の空間なら、熱帯ドリームセンターは癒しのひとときをゆったりと味わえる静の空間だ。

熱帯・亜熱帯の植物を収集して展示するほか、イベントという形でわかりやすく紹介し、植物の魅力を発信している。

また、沖縄各地の絶滅危惧種を栽培し、種の保存に努めるという役割もある。１９９８年には日本で初めてバオバブの花を咲かせることに成功。世界一大きなランであるグラマトフィラムを栽培するなど、珍しい植物の栽培にも取り組んでいる。

「財団の仕事として、沖縄の植物を守りましょうというのが基本スタンスです。同時に、よりたくさんのお客様にいろんな角度から植物を楽しんでもらおうと、企画展も月ごとに行っています。イベントとしては２月の沖縄国際洋蘭博覧会が最大規模で、例年約２万人のお客様にご来場いただいています。昨年はＡＰＯＣ11（アジア太平洋蘭会議・蘭展―沖縄大会―）が開催されたので、約３万６千人の来場がありました。日常的にはもっと小規模のイベントをいろいろ開催しています。例えば生花を使ったクラフト体験なども、県内の方を中心に根強い人気があるんですよ」

と語るのは熱帯ドリームセンターの瀬底奈々恵主任。ゴールデンウィークや夏休みには世界一大きな水草であるパラグアイオニバスに乗る体験会など、ファミリー向けの企画展も開催している。また、熱帯果実展の際には館内売店でドライフルーツを販売するなどの工夫も。

「スタッフはみんな植物が大好き。お客様も植物をお好きな方が多いんですが、とはいえ企画がマニアックになりすぎないように、気をつけています（笑）。海洋博公園の中には複数の売店がありますが、植物に関するものを販売しているのは熱帯ドリームセンターの売店だけ。ランなどのお花も売っているんですよ」

毎日11時と14時には、職員が園内を案内する無料のフラワーガイドツアーを開催。音声案内を聴きながら館内を回れるＰＤＡも無料レンタルするなど、利用サービスも充実している。また、軽食やスイーツを楽しみながらくつろげるカフェ「スコール」も好評だ。

熱帯ドリームセンターには５棟の展示温室があり、うち３棟で約２０００鉢ものランを展示。ベストの状態を保つため、ランの鉢は毎日入れ替えているという。

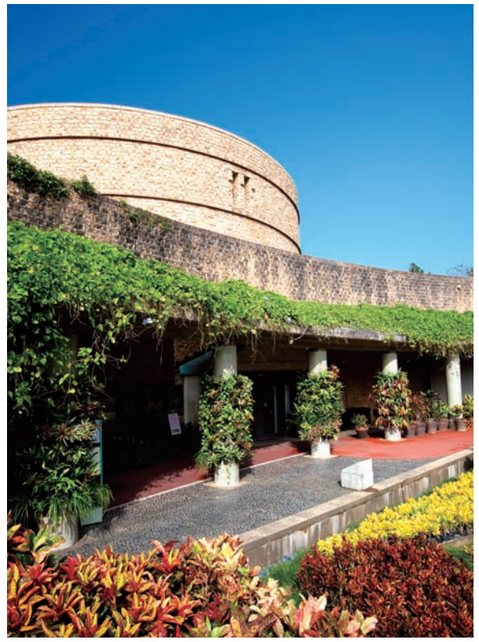
「展示温室が表舞台なら、楽屋にあたるのがバックヤード。お客様には公開していませんが、温室が21棟あって、合計でおよそ数万鉢を養生しています。その９割がランの仲間で、残り１割が観葉植物と果樹ですね」

研究、種の保存・栽培、啓発といった活動から得たノウハウは、地域貢献にも活かされている。

「地域との連携も、財団としては大切な役割です。企画展で作ったパネルを貸し出すなど、県内各地で開催される植物関連イベントに協力したり、絶滅危惧種を守るための専門的なアドバイスをしたり。また、市町村単位でのラン愛好家の展示会など、植物愛好家の皆さんや同好会との情報共有は常に行っています」

観光、研究、種の保存、普及・啓発、そして地域貢献。さまざまな役割を担う熱帯ドリームセンターは、顧客サービスを一層向上させ、より魅力ある施設を目指している。

昨年４月から、エントランスウォールに植物を配してより華やかにイメージアップ。



カラフルな葉の色が楽しめるクロトンの企画展を実施中のクロトンパティオ。

さまざまな植物を育てているバックヤードの温室。

上：展示のために支柱立てをしているスタッフ
右：トロピカルフルーツカフェ「スコール」オリジナルの月桃ゼリー450円。甘さ控えめのサッパリした味。

沖縄出身のプロゴルファーにちなんで「アイ・ミヤザト」と名付けられたデンドロビウム。2007年生まれの新品種だ。

右：葉にも果実にも白い斑が入る珍しい品種のバナナ、コアエ。高さ５ｍほどになる。威風堂々とした存在感。

下：熱帯ドリームセンター担当の瀬底奈々恵主任。

スポットライトの向こう側 Vol.4

第二黒潮丸

船長 市川 米夫 いちかわよねお

沖縄美ら海水族館の展示生物の調査収集と、本部のカツオ漁を守るという二つの使命を背負った沖縄美ら島財団所有の漁船、第二黒潮丸。本部漁業協同組合と、沖縄美ら島財団の二者の協力体制のもとで操業するという初の試みで、地域に貢献しながら水族館の運営にも寄与するというユニークなシステムが実現した。財団が船を所有して地域でも使うという発想は、その都度船をチャーターするよりも低コストで合理的だ。今回は市川船長に話を聞いた。

―展示生物の調査収集で、第二黒潮丸はどの辺りまで行くんですか？

市川「だいたい沖縄近海ですよ。北は奄美辺りから硫黄鳥島にかけて。硫黄鳥島へ行く時は船上で2～3泊することになります。去年からは伊江島から慶良間まで、クジラ調査にも出ています」

―おもにどんな魚を収集しますか？

市川「カツオやキハダなんかの回遊魚が多いですね。小さい魚も獲るには獲りますが、ただ、小さい魚は水産価値がないものが多いので、自分たち海人（うみんちゅ）はどんな魚か正直よくわからない（笑）。」

―生物採集だと普通の漁とは勝手が違いますよね。

市川「違いますね。第二黒潮丸は大型の回遊魚を生かしたまま運ぶために、魚槽が大きい構造になっています。一本一本釣って、船内の魚槽にリリースするんですよ。新鮮な海水が自動で循環するようになっている大型の魚槽と、通常の操業で使う小型の槽もあります。捕獲した魚の世話をするために、水族館の職員も同行しますよ。調査収集で船に乗るのは、漁業者が4名、水族館職員は多い時で8名ですね。無人潜水艇の『ROV』を使うことも、マンタなんかの大型生物を持ち上げることもあるので、船の中央部には大きなクレーンもついています」

―無人潜水艇は水中映像を撮影するんですか？

市川「面白いのも映りますよ。例えばアカマチ※は一般的には岩場にいる魚だといわれますが、砂地にいるのも発見されました。魚の生態はよくわかっていないこともあるんですね」

―第二黒潮丸は、地元の漁業にはどのように貢献しているんでしょうか？

市川「調査収集はだいたい月に1回ぐらいで、あとは普通の漁に出ています。本部は元々カツオ漁が盛んな地域。最盛期には40トンクラスの船が7～8隻あったんですよ。エサにする雑魚をとる人、カツオを釣る人で、船には30名あまりが乗り込むのが普通でした。今はカツオも減っているし、燃料が高騰して大型船を出したのでは利益が薄い時代。エサ取りとカツオ釣り、合計5名で操業してどうにか採算が取れています。3年ほど前に大型のカツオ船が引退したので、もう本部で伝統的なカツオ漁はできないかと思いましたが、この第二黒潮丸のおかげで今もカツオ漁が続けられています」

―第二黒潮丸が「かつおのまち・本部町」を背負っているんですね。

市川「僕ら海人は一回漁にでたら、長時間労働です。曜日も時間も関係なく海に出る。難儀な仕事だけど、釣った時の楽しみがあるからやめられない。でも若い人には魅力が少ないのか、後継者不足が課題です」

―財団と漁協の連携で、どんなメリットがありますか？

市川「水族館職員の魚の生態についての専門知識はすごいですよ。今、財団と漁協、本部町の三者でカツオ漁のエサとして使う小魚を自動的に獲れないかという実験をしています。イカダと網を設置して、夜になると自動でライトをつけて魚をおびき寄せるんですよ。網の中に入ったら逃げられない仕組みになっているから、漁の前にその網から小魚を取って行けばいい。それから、獲れた小魚を沖のイケスで蓄養するというのもテスト中です」

―エサの安定供給ができれば、カツオ漁も活気づきますね。

市川「日本でも初の試みだそうです。こんな事は、自分たちだけではできなかったし、勉強になりますね。進んだもの、新しいことに取り組むのは面白いですよ。財団は、地域の漁業活性化に、確実に貢献していると思います。それに、この船に乗っていれば、自分にもいろんなヒントがもらえるから、個人的にもプラスになっています。今、気になるのは、第二黒潮丸に定年制があるかどうか（笑）。」

本部町渡久地漁港内に係留されている第二黒潮丸（奥）と餌採り実験用の筏（手前）。

カツオなら 100 尾が入る大型の魚槽とクレーンが第二黒潮丸の特徴。トイレ、仮眠のとれる船室があり、2～3泊なら快適に過ごせる。

※アカマチとは、沖縄での呼び名で、正式には浜鯛（ハマダイ）と云う。沖縄では水深300m付近で漁獲され、体は全体に美しいピンク色。高級魚として知られる。飼育が難しく、沖縄美ら海水族館で初めて長期飼育に成功した。

沖縄の大木

＜和名＞
オガタマノキ
＜科名＞
モクレン科
（学名：*Michelia compressa*）
Vol.22

オガタマノキは関東以南、琉球諸島、台湾に分布する暖地性の常緑高木です。日本各地の神社の境内によく植栽されていて、神木として祭られることが多い木です。オガタマの名前は、「招霊（おきたま）」が転化したものといわれ、枝を神前に供えるなど神事に使われます。

幹はまっすぐに伸び、葉には光沢があり、花は薄いクリーム色で強い香りを放ち、果実はいびつな球形で中に赤い実がつきます。樹皮は灰白色で鳥もちの材料となり、材は床、柱に利用されます。

沖縄県東村有銘区の御嶽には高さが約15m、幹回り3.5mオガタマノキがあります。「沖縄の名木百選」（沖縄県森林緑地課）によると、推定樹齢は200年以上とされ、2001年1月30日には東村の天然記念物に指定されています。（東村教育委員会）

林内の傾斜地にそびえたち、四方に枝を伸ばしていますが、根元からは全体の樹形を確認することはできません。

2012年9月の台風17号によりこのオガタマノキは被害を受けて大きな枝が折れてしまいましたが、専門家により折れた箇所を保護する治療が行われました。

オガタマノキの生育する御嶽は、地域の拠り所として崇められており、周辺は地域の人々によって草刈や清掃が行われ、年末年始の祭事、綱引き等も継承されています。

今後、東村では周辺を整備し、オガタマノキを保護しながら、鑑賞できるようにする予定もあり、地域の宝として次世代へ引き継いでいこうとしています。（上原マリ子）

「春咲へひとっ飛び！」プロジェクト

「春咲へひとっ飛び！」プロジェクトは、沖縄県の観光振興策事業「平成25年度エンターテイメント創出・観光メニュー開発支援事業『元気プロジェクト』」の助成事業として採用されたプロジェクトです。日本一早い春が訪れるやんばるの魅力を沖縄の冬の観光コンテンツ「花」を通じて県内外・海外へ情報発信、ＰＲを展開し、沖縄県北部「やんばる」への誘客促進を目的としています。

２０１３年10月３日、プロジェクトの主要コンテンツである、スカイネットアジア航空（ソラシドエア）との連携による、冬から春の代表的な花（蘭・桜・椿）をデザインにしたラッピングジェット機が神戸―那覇路線にて就航しました。就航イベントでは、記念品の配布、本部町・今帰仁村・（一財）沖縄観光コンベンションビューローのキャラクターが搭乗者を歓迎して会場を盛り上げ、「やんばる」の魅力のＰＲを行いました。

また、11月16日には神戸三宮センター街にて、神戸―那覇路線の利用拡大とやんばる地域のＰＲを目的としてキャンペーンイベントを実施しました。琉球國祭り太鼓の演舞、ミス沖縄による沖縄観光のＰＲ、やんばる地域の特産品が当たる大抽選会等を実施し、神戸三宮並びに関西地区の皆様に今冬における沖縄やんばるの観光情報を紹介しました。

12月15日には、ＢＳフジにて「春咲へひとっ飛び！やんばる春めぐり」と題して海洋博公園熱帯ドリームセンターや沖縄国際洋蘭博覧会を紹介する番組の放映も行いました。

今後も、Ｗｅｂサイトでの情報発信、県内外・海外でのプロモーション活動、情報誌等によるＰＲ展開、やんばる地域の方々と連携した旅行商品開発等を実施し、北部地域の冬の観光活性化に取り組んでいきます。

那覇空港で行われた歓迎セレモニーの後で、参加者と記念撮影。

神戸三宮センター街で行われたキャンペーンイベントの様子。

「沖縄国際洋蘭博覧会2014」&「第9回美ら海花まつり」開催決定！

海洋博公園では「沖縄国際洋蘭博覧会2014」・「第９回美ら海花まつり」を開催いたします。

「沖縄国際洋蘭博覧会2014」（２０１４年２月１日（土）～11日（火・祝）開催）は、今回で28回目の開催となる歴史ある博覧会です。国内外の団体・愛好家から出展された選りすぐりのランをはじめ、熱帯ドリームセンター館内は２万点におよぶランで埋め尽くされます。また、会場は「不思議の国のオーキッドガーデン」をテーマに色とりどりのランで装飾されるほか、沖縄初公開の植物木版画の最高傑作「蘭花譜」の特別展示等を行います。

また、同時期に海洋博公園全体で開催される「第９回美ら海花まつり」（２０１４年１月25日（土）～２月23日（日）開催）では、公園のテーマである「太陽と花と海」を強く印象づけるように、約20万株の草花・観葉植物等を用いて公園全体を装飾します。

草花による物語の世界の再現展示や、ジンベエザメ・マンタなど海の生物を大型造形物花壇で立体的に演出し会場を彩ります。

その他、海洋博公園では「ツバキ展」、やんばる地域では「本部八重岳桜まつり」「名護さくら祭り」など「春咲へひとっ飛び！」プロジェクトで紹介する冬のやんばる「花」イベントが目白押しです。皆様、是非やんばるの「春」をお楽しみください。

昨年の沖縄国際洋蘭博覧会会場（左）と鮮やかな花で彩られた美ら海花まつり会場（右）の様子。

モントリオール・モザイカルチャー世界博2013において「Gold Medal 3D」を受賞

沖縄美ら島財団は、カナダのモントリオールで２０１３年６月22日から10月６日まで開催された「モントリオール・モザイカルチャー世界博2013」に出品し、国際部門において3位に相当する「Gold Medal 3D」を受賞しました。

モザイカルチャーとは、金属フレームをネットで覆い中に土壌を詰め、花や緑を植え込んで創る花と緑の立体アートのことで、開催５回目となる今大会では、世界20か国以上から約50作品が出品されました。

当財団は、日本ではまだ馴染みの薄いモザイカルチャーの技法を10年前から導入し、海洋博公園においてイルカやタコなどの立体造形物を展示しています。今後もモザイカルチャーの普及に努め、幅広い層の方々に植物の魅力や美しさに触れていただければと思います。

出展作品「Small Clownfish and Anemone（小さなクマノミとイソギンチャク）」

主催：沖縄タイムス社　共催：沖縄美ら島財団

沖縄こども環境調査隊2013

５回目となる今回の沖縄こども環境調査隊では、沖縄島と奄美大島の自然を題材に学習を行いました。

沖縄島での環境学習（計５回）や奄美大島視察（２０１３年７月30日～８月２日）で希少動植物や環境問題に関する現地視察や施設見学などを行い、９月４日に開催したシンポジウムで学習の成果を発表しました。

今回は、視察先である奄美大島でも「奄美こども環境調査隊」が結成され、初めて２地域の調査隊合同によるシンポジウム開催となりました。視察地の調査隊とともに活動することにより、隊員同士がより理解を深めていることが感じられました。

調査隊としての活動は終了しましたが、今後も地域の動植物や環境問題への関心を忘れず活躍してほしいと思います。

上：シンポジウムでの学習発表
下：源河川（名護市）での環境学習

台湾でＰＲ活動を実施

沖縄美ら島財団は、（一財）沖縄観光コンベンションビューローが台湾からの観光客誘致を目的に実施する２つの沖縄誘客プロモーションに参加し、首里城公園や沖縄美ら海水族館のＰＲを行いました。

１つ目は、２０１３年10月18日から10月21日にかけて台湾台北市で開かれた「台北国際旅行博2013（ITF2013）」に参加し、沖縄ブースでＰＲ活動を行いました。台北国際旅行博は世界60カ国、およそ９００団体が参加し、31万人が来場する台湾最大の観光展です。

当財団職員は、琉装をして三線を弾きながら、来場者へのパンフレット配布や沖縄観光に関する説明を行ったほか、ステージでの沖縄紹介プレゼンに参加し、首里城公園の魅力を紹介しました。

２つ目は、10月25日から10月27日にかけて、台湾―沖縄間を運航するスタークルーズ社の定期クルーズ船「スーパースター・アクエリアス号」に乗船し、『沖縄フェスティバル』と題して沖縄観光の魅力紹介や、沖縄芸能ライブ、景品が当たるクイズ大会などの観光プロモーションを実施しました。

当財団職員はここでも琉装し、ステージでの首里城公園の魅力紹介や、来場者との記念撮影を行いました。音楽芸能ライブの締めくくりは、観客と一緒になってのカチャーシー。船内は沖縄ムードに包まれました。

沖縄を訪れる外国人観光客は年々増えており、首里城公園や沖縄美ら海水族館でもたくさんの外国語が聞こえてきます。これからも海外からたくさんの方にお越しいただき、沖縄の自然や歴史・文化の魅力に触れていただけるよう、海外観光客の誘致にも努めてまいります。

スーパースター・アクエリアス号の船内で沖縄の魅力をPR